



河童の 抜け殻



川崎ゆきお

「夏ですねえ、妖怪博士」

担当の編集者が博士宅の庭を見ている。南向きのため、暑いので、簾が垂らしてあるため、実際には簾を見ている。夏を感じるのは、その簾だけではなく、蝉の声だ。庭木に蝉が来ているのだろう。

「あの蝉はうちの蝉でな」

「博士の蝉ですか」

「私が所有しておるわけじゃないが、抜け殻があった。だから、庭にいたんだろうねえ」

「それで、出てきたのですね」

「蝉の抜け殻を見て、河童のミイラを思いだしたよ」

「インチキな剥製でしょ」

「そうなんだが、ミイラじゃなく、河童の抜け殻なんじゃ」

「河童は脱皮するのですか」

「河童がいる場所は川縁だろ。蛇もいる。だから、似たようなものかもしれん」

「僕は河童は蛙に近いと」

「蛙も似たような所にいるねえ。川辺だ。私は亀と蛙の掛け合わせだと思う。カッパの甲羅は亀だろ。しかし、クチバシのように尖った口元はアヒル顔なので鴨かもしれん」

「それで、その河童の抜け殻はどうなったのですか」

「紙で出来ていたらしい」

「そんなに持つものですか、油紙のような」

「だから、最近のものだろ」

「今頃、そんな妖怪を作る人がいるんですねえ」

「ミイラじゃなく、最初から張りぼてなんだ。中は出て行ったので、もぬけの殻」

「はい」

「手の指など、そのままねえ。しかし脱ぎにくかったに違いない」

「河童って、ほぼ人間の体つきですよ」

「だから、抜け殻も無理がある。全身ぴったりの服を脱ぐようなものだからね。個別に破らないとね。だから、それで河童の抜け殻じゃないと、分かったんだが」

「博士、そんなこと想像しなくても、最初から存在しないですよ」

「河童の抜け殻がかね」

「いえ、河童です」

「ああ、河童ねえ」

「いないでしょ」

「それを言えばおしまいじゃないか」

「そうですねえ。妖怪博士の意味もなくなりますよね」

「まあ最初から、なきに等しいが」

「その河童の抜け殻は、その後どうなりました」

「消えた」

「軽いから、飛んでいったのですか」

「ばらけてしまった。かなり乾燥していたし」

「工芸品としての価値があったんじゃないですか」

「紙を貼り重ねて面などを作る」

「ありますねえ」

「所謂張りぼてじゃ」

「ハリーポッターを連想しました」

「ああ、あれも張りぼてだろうねえ。しかし、張りぼては張りぼてで意味がある。使いようじゃ。また、張りぼてでないと困ることがある。中に何も詰まっておらんのが張りぼて、それが役立つこともある」

「張り子の虎なんていいですよ」

「怖くないじゃろ」

「そうです。張り子だと分かれば」

「怖がらせないためには、インチキも必要なんじゃ」

「でも、最初は怖いですよ。虎でしょ」

「しかし、すぐに分かる。指で押すズズッと動いたりする。軽いからな」

「はい」

「その軽さがいい。使いようじゃ」

「すぐに分かる嘘のようなものですか」

「妖怪がそうだな。嘘だと分かるからいいんだ」

「妖怪学の深みですねえ」

「そうじゃない。浅いからいいのじゃよ。深く考える必要がない。そういうものも、必要なんじゃ」

「それより、河童の抜け殻を作った人は見つかりましたか」

「もういないだろう。生きておれば百歳を越えておる」

「ああ、儚いものですねえ。人の寿命も」

「虎は死しても皮残すと言うなあ。しかし、その虎皮も、いつまでも残らん」

「それは寂しい話です」

「この庭の蟬の抜け殻も、風に吹かれて、何処かへ行く。私が踏んでしまうかもしれんしな。ずっとは残らん」

「蟬の状態になってからの寿命は短いと聞いてますよ」

「そうじゃなあ。地中にいるときの方が長いようじゃ」

「何か寂しい話ですよ」

「これをものの哀れと言うのじゃろうなあ」

二人は蟬の声を聞いている。かなりうるさいのだが、そう感じないのは、あとわずかな命のためかもしれない。

了